

心模様、5354 のつづき、第1章、第2項、

**アラスカ魂に触れる
成田ーシアトルーフェアバンクス**

今、**コロナ問題**始め、世の中、**公私共、多事多難**。注意することが多い。

この**10月**は、3～5年ごとの脱皮や、**目標の修正**。

取材は勿論**継続**。**時間の使い方、心身健康維持の方法、HPとの関わり方**等々の**課題山積**。

遠近取材や**夢挑戦**。**目標があるので有難い**。

出来る事を楽しむ。新旧の積み重ねを創意工夫して、^{くらーく}久楽流に実践するのみ。



アラスカ魂に触れる

成田ーシアトルーフェアバンクス

2001年6月2日（土）夕刻、成田からの出発の前に、私はいつもどおり

鎌倉円覚寺境内を散策し、心を落ち着けた。

いわゆる未知との遭遇、いつ、どのようなことになるうとも、

平常心を失うことなく、事態に対処していかねばならない。その覚悟を今一度、

心を新たにすねらいもあった。

前日、この北鎌倉で投身自殺があった。つい思いあまっていたことであつたであろうが、

その人は、これまでどんな人生を送ってきたのだろう。

一歩さがって考えれば、誰もが同じ道をたどるかも知れない恐ろしさ。

好きなことをさせていただけの幸せ、意義のある、地球ひとり旅を誓う。1日1日を、

強くかつ意義のある生き方をするしか道がないことを痛切に感じる。

この日、成田空港を出発したのは午後5時だった。

飛行機は、ノースウエスト航空。成田からシアトル。シアトルでアラスカ航空に乗り換えて、

フェアバンクスまで。これがこの日のスケジュールだった。

飛行時間は、成田からシアトルまでが、約8時間30分、シアトルから、

フェアバンクスまでが、約3時間40分、

乗り継ぎまでの待ち時間を合わせると、16時間弱の距離だった。

それにしても、今回もまた、荷物の量はすぎましかった。

トランク30キロ、機具類20キロ、それに毎度のことだが、海外から投函する夢絵ハガキ

1,200枚や書類が10キロ、合計60キロになっていた。

これらの荷物を背負っての、アラスカひとり旅。それもこれも、自分が望んでのこと。

何の苦勞もしないで、成果だけ期待する話は、私の辞書にあってはならない。

誰に責任があるでなし、責任があるならば自分だと、
ただただ開き直っての成田出発だった。

6月のアラスカは白夜、なかなか日が沈まないので時間配分が問題。
時差の調整も大事だ。寝食への配慮、体調維持が最優先事項となる。中国のような
近距離のフライトや、南北に何千キロ飛び越えるような
旅などの時の体内時計はあまり狂わない。
そこで、旅の疲れさえ取れば、生活のリズムは乱されなくてすむ。

しかし、東西に移動する時は、経度が15度移動するごとに日本時間と1時間ずつずれてくる
東京とニューヨーク間の時差は14時間、夜と昼が逆転する。
東京からニューヨークへ行く方が、ニューヨークから東京へ帰るより、身体が楽。
身体の調子が正常に戻るのは、
時差1時間につき、1日と決められるわけでもなく、個人差もある。

とにかく、ジェットラグ（時差ぼけ）は、心身の機能を低下させるのは事実だ。
私など自由時間がたっぷりの気ままな旅、体調は最優先事項。
ひとり旅でもあり、張りきりすぎて、体調をこわすほど、**若くはない。**

身体のサインを聞きながら、旅を楽しむことにしている。
そうしないと、無理を重ねて、後でゴツソリとツケを支払わされることになりかねない。

ルーヴル美術館で、考えさせられる有名な話がある。
添乗員さんが、「15分しかないので、三つだけしか見られません」
「これがかの有名なミロのヴィーナスです」「それでは上に行きます」と、ダダダッと
2階にかけあがり、レオナルド・ダ・ヴィンチの「モナリザ」とミレーの「晩鐘」を見て
15分後に、ドドドッと出て行った。

フランスの老婦人が、ポツリとつぶやいた。
「あれで**ルーヴル**を見たということになるのかしら・・・」
神風「見た見た族」と呼ばれているらしい。
私はそうした旅は、まっぴらご免。3回の旅より1回でいい。心が喜ぶ旅がしたい。

機内では、ひたすら睡眠をとることに力をそそいだ。
力をそそいだからといって、すぐに眠れるわけではなかったが、とりあえず睡眠だった。
普段から睡眠は短かった。僻地に行けるのも、寝食、健康のおかげ。
しっかり機内食を食べ、うつらうつらしながらも、やはりこれからのことが気になった。
脳裏から阪神、三越、両百貨店で夢絵作品展のことが、どうしても離れない。
まだまだ時間があるじゃないかと、
努めてマインドコントロールするものの、一向に効きめがない。
自分は弱い人間だと、思った瞬間、いつの間にか、眠りに入っていた。

がやがやとした人の気配で、ふと目をさますと、
締め切った窓の隙間から注ぐ明かりが、すっかり明るくなっていた。
時計の針は現地時間で、朝の7時半、シアトル到着まで、あと2時間だった。
シアトルに予定通り到着した。
現地時間で、朝の9時30分、窓外は雨だった。入国手続きが終わり、
フェアバンクス行きの飛行機をチェック後、私は、出発待合室で、時間を潰すことにした。
出発までには、まだ相当の時間があつた。

これまでの行脚の旅では、結構綱渡り的な接続時間で、各地を飛び回っていた。
飛行機が遅れ次の接続に間に合わず、随分困ったことがあつた。
そんなことがないようにと、今回は到着から出発まで、3時間あまり確保してあつた。
空港内を見て歩くのも、結構楽しいもの。待合室のいすに腰をかけると、無性に眠たかつた。
キオスクでは、マリナーズのイチローの顔が大きく掲載された新聞、シャツなどが、
所狭しと並べられていた。
こうした野球人気もあって、今回はやたらと、日本人の姿が目についた。

1986年（昭和61年）50万人前後の海外旅行者が、2000年（平成12年）には、
1700万人と14年で、3倍以上に増えている。

ショッピングや見物、自然志向の人。視野や見聞を広げるのに、
海外に身を置くのは大切なこと。脱日常、人間の幅を広げる旅、心の豊かさを求める旅、
目的も様々、人生いろいろ。

シアトルを定刻の午後1時17分に出発し、フェアバンクスへと向かった。
飛行機は、ほぼ満員だった。シアトルは、東はワシントン湖、西はエリオット湾に挟まれ、
「水上の都会」と呼ばれているのに対し、
フェアバンクスは、タナナ川流域にあるアラスカ第二の都市である。
機内に入ってホッとしたのか、急に疲れが出てきた。
頭痛がしてきて喉も痛い。持参した薬を飲む。どうやら出発までのハードなスケジュールが、
ここにきて、その悪影響をもたらしたらしい。

フェアバンクスまでの飛行時間は、あとわずか50分。
何しろ旅は始まったばかりなのである。ジェットラグ（時差ぼけ）からくる体調不良も重なり
今回は少々こたえる。正常ならば、現地に到着してすぐに仕事にかかっても
疲れは覚えない。いくら気力が充実し、いくら頑強な体があっても、過信は禁物。
頭でブレーキをかけても、心がアクセルを踏む。長いひとり旅が控えている。何もしないで、
静かな時を待て！駿馬でもないのに、我ながら、我が心をなだめるのは大変だ。

体調は、フェアバンクス到着時が最悪だった。熱もあった。
何でこんなところで？ と自問自答した。
熱があるから、しんどいから空港にへばりついている訳にはいかないのだ。
私は、重たい荷物を持って、フェアバンクスの市内にあるホテルにチェックインを済ませた。
ここから、自分との戦いでしかなかった。部屋に荷物を預けて、外に出た。
時計の針は、現地時間で午後4時過ぎだった。睡眠は、夜まで我慢することにした。
その方が時差ぼけを一挙に解決することになると思った。

観光ではない旅だが、観光案内所に行き、現地資料を確保。資料は安心のため、
西も東も、わからないのでは困る。未知への挑戦、
独自の視点での開拓、冒険の旅が久楽流である。先入観や期待感を
持ちすぎると、旅が楽しくなくなる。

夕食は、中華料理でたっぷりと栄養をつけ、ホテルに戻った。
部屋で地図をあれこれ推理する。しばらくして、地図を持ち、ホテルのバーで、
ビールを楽しむ。地図を見ていると、カウンターの女性が、話しかけてきた。
アラスカの旅は、英語が通じる。
地図を持っていたので、話はずんだ。ジントニックを追加注文。
こうした会話も、旅の楽しみの一つである。

「ゆうべどこにいたの？」

「そんな昔のことは覚えていないね」

「今夜あってくれる？」

「そんな先のことはわからない」

これは、ハンフリー・ボガードのセリフ、映画は「**カサブランカ**」、なぜか、この映画を
連想させてくれるような、酒場の雰囲気だった。

少々、酒がまわり、夜空を見ることなく部屋に戻ると、ボタンだった。

先のわからないアラスカの旅が待っている。

その夜、夢は見なかった。